

むすび塾

「次」への備え

地域と結んで

東日本大震災の教訓を踏まえ、河北新報社は地域住民らと一緒に「次の地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を始めました。被害と犠牲をできる限り抑えるため、一人一人がどう対応したらいいのか、東北や被災・復興支援機構(東京)などと連携して展開します。震災の死者・行方不明

者は2万人近くに上ります。「広く浅く」という防災報道が被害軽減に十分貢献できなかったことを反省、意見交換や避難路の検証などを通じて課題・問題を掘り下げます。「むすび塾」の名前には、地域と人々とのつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいという思いを込めました。

避難時混乱の教訓糧に

第1回「むすび塾」は6日、東松島市の大曲地区センターで開いた。貝田行政区の住民11人が参加し、被災・復興支援機構の木村拓郎理事長がコーディネーターを務めた。参加者からは複数の避難路確保の重要性とともに、「犠牲者を出さないためには、日ごろからの声掛けと付き合ひが必要」と訴える声が続き、地域の連携の大切さを再認識した。

台に逃げた方が安全だと判断し、3人離れた運動公園に車で移動。渋滞を避けて裏道を通り、三陸自動車道本インターチェンジ近くに向かい、津波から逃れた参加者もいた。木村理事長は「複数の避難場所を想定し、日ごろからいゆるなを深めておくことが重要だ」とアドバイスした。

参加者の主な発言

参加者には震災時の行動や教訓について、事前にメモを書いてもらい、会場で大きな紙に貼り出して議論のきっかけとした。主な項目(この発言とメモを紹介する)。

「地震の揺れが収まった後の様子、避難しようと思ったとき」

「津波警報なのか津波注意報なのか防災行政無線が聞き取りづらかった。大津波警報が出て、津波の高さや来る場所が分からなかった」

「日野長介さん69」

「「津波に巻き込まれたが、通行人から「水が上がってきた」と教えられ、すぐに高い場所へ」

「阿部優子さん57」

「避難所生活は大変だったが、何とか乗り越えられたのは地域の絆、家族の絆のおかげ」

「佐藤景子さん62」

「自分の身は自分で守るという意識付けが重要。それがあつてこそ要援護者に目を向けることができる」

「三浦忠治さん72」

「個々人が災害の知識を持ち、対応力を高めることが地域全体の防災力強化につながる」

「千葉圭悟さん68」



木村理事長が進行役を務め、貝田地区の住民が震災発生時の教訓と今後の備えについて、活発に意見を

出した「むすび塾」東松島市の大曲地区センター

地域の問題浮き彫りに
貝田行政区長・中山勝文さん(66) この地区は自宅が津波で流されたのではなく、床上浸水などになった浸水地域。自宅での避難者が多かった。被害が甚大な被災地と比べ、メディアに取り上げられることがなく、地域や住民が抱える問題を詳しく知る機会がなかった。今回、住民たちが語った生の声を参考にして、犠牲者を出さない地域を築きたい。

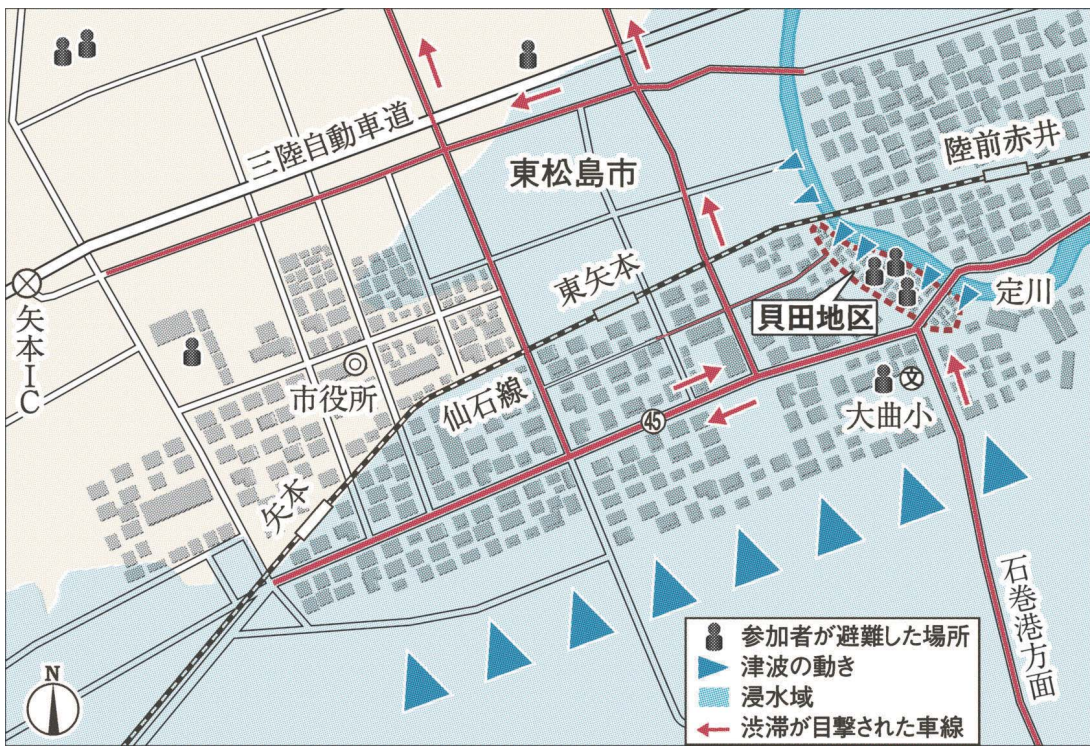
家族のルール決めたい
会社員・及川幹也さん(46) 震災当日は一時、連絡が取れない家族がいて不安だった。地域の避難場所は大曲小だが、私も含めて家族の勤務先や学校が市外なので、行けなかったり、時間がかかったりする場合がある。避難にはいくつかの選択肢があった方がいいと感じた。家族で話し合っ、ほかの落ち合える場所や避難のルールを決めたい。

共助の重要性を再認識
無職・阿部優子さん(57) 昨年8月に亡くなった母は震災当時、高齢のため、歩行する際に介助が必要だった。本震災発生後、自宅に妹と居たが、近所の女性が手伝いに来てくれたおかげで、車で逃げる事ができた。再び津波は襲ってくる。議論を通して、迅速な避難を心掛けるとともに、近所の人と助け合える関係を築くことの重要性を再認識した。

要援護者の情報共有を
佐藤健東北大災害科学国際研究所教授(地域防災・防災教育)の話 災害時の要援護者を把握しているのは民生委員だが、委員が1人の地区は災害時に不在の恐れがある。情報共有が必要だ。仙台市には、各家庭の了解を得た上で家族構成などを記した名簿を作成した町内会があった。東日本大震災でも30分ほどで住民の安否が確認できたという。地域と学校で災害対策について話し合う機会も設けるべきだ。普段から連携することが、将来の災害の備えにつながる。

防災訓練 自主組織を核に
宮城県加美町危機管理室長 早坂安美さん(56) 宮城県加美町は来年1月の新防災計画策定に向けて準備を進めています。東日本大震災の被災自治体の実態調査などに取り組む東北大学院の島田明夫教授と連携

東松島市大曲貝田地区 石巻市に近い市東部に位置し、石巻湾からは3キロ弱離れている。市のハザードマップでは浸水域外にある住宅地で周囲に高台はない。現在、135世帯が暮らす。指定避難場所は国道45号を挟み数百メートル海側にある大曲小。東日本大震災では、石巻港方面からの津波に加え、地区に隣接する定川の堤防を超えた津波で浸水被害を受けた。浸水高は1.8メートル前後で、住宅は1階部分が水没。地域内では、家の片付けをしていたお年寄り夫婦らが津波の犠牲になった。



逃げ道の確保
まず足元から
大曲地区は平地で、津波の時に安心して逃げられる高台が近くにないという問題がある。高齢化が進み、導への迅速な避難は難しい。同様の課題を抱える地域も多く、夜間に地震が起きた場合、避難はさらに困難になる。地震の震源、規模によっては、津波が東日本大震災の大津波よりも早く来襲する可能性がある。将来的には避難レベルのような場所を確保するべきだ。夜間の避難に関しては、ソーラー充電式の庭用ライトを、各家庭が自宅前の道路沿いに3個ほど置く取り組みを地域全体で行ってほしい。防犯にも効果がある。家員の固定も重要だ。倒壊による負傷を防ぐだけでなく、外へ早急避難できる効果がある。家員が倒れ食器などが散乱する室内を抜け出すのは危険が伴う。家員の固定は全戸で行ってほしい。

教職員が得た教訓整理へ
東北学院大施設課課長補佐(多賀城キャンパス担当) 大宮司俊彦さん(54) キャンパスの教員、職員は、合わせて135人です。東日本大震災前から倉庫に500人が3日間過ごせる水、乾パン、毛布を備蓄。防災



役割分担は、管財、学生厚生など日常業務の延長になっています。震災当日は、避難誘導、施設の安全確認、海側に住む学生の待機などに続き、400人を超える地域住民らの受け入れに追われました。

トイレに流す水を水槽からくみ上げて運ぶなど大変な作業もありましたが、教職員が少ない分、気心が知れていたことで円滑に対応できました。現在、震災後の学内の活動や、感じたことを文書にまとめています。教訓を整理して、今後の防災対策に生かしたいと思います。